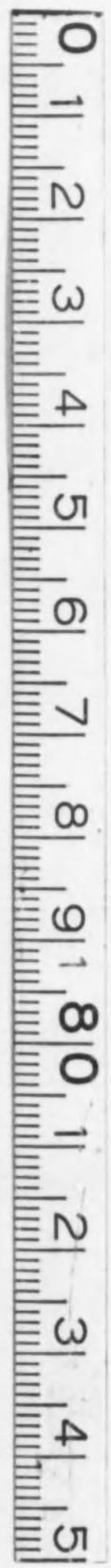


楷行  
草隸

四體千字文

全

特 259  
117



始



特259  
117

井上千圃先生書



四體千字文



東京 辰文館發行



# 雅趣



## 四體千字文

千字文は梁の武帝の時代に、散騎侍郎周興嗣が、帝の命を奉じて次韻せしものにかゝる。吾人字淺く、未だ古文の如何なるを知らずと雖も、周侍郎が之をよみしに當り、苦辛修繕の餘り、鬚髮為めに白くありしと傳ふ如く、推敲研鑽一字一句も苟くせず、其の心血をそそぎ竭せしを知らば是なり。

茲之を楷行草隸の四體に書列す、聊々習書に適せば筆者の幸甚之に過ぎば。

永字八法

間架結構法



昭和丙子初夏

為梧桐書院

千圃題



側ロク

勒ロク

努ド



側は点の始めにて傾くの意あり。上方より勢いよく筆を落し、右下へ斜に引いておき、筆先を点の中程まで戻して左に撥るあり。其の形は恰も鳥の今またに飛ばんて下を臨む形あり。

勒は側を伸ばした如くにして首尾を低く中央より下に向ふ。勒はまろひひい心あり。始め点をうつやうに強く筆を落し、稍や上向きに軽く右に筆を運び中程より下向きに引き伸ばし程よく筆を止め力をいれて抑へ左へ少筆を戻す。首尾に力あるも途中も余り力の抜けぬやうに注意すべし。

努は努ドとも言ふ。勒の筆法を縦にして裏より見たる形あり。点もうつ心持らして上より筆を落し少く

趨テキ

策サク



その氣味に下に引き、強く抑へて上の方に其のま、筆を起し、之れ又少く戻す心にて止めし。  
趨は努の最後の筆を止めた處を一廻轉する心にて、力を入れ左へ勢よく撥る。趨はおどろにて躍と同じ意味あり。ハネは筆勢を自然に抜くものにて、わざと勢をつけてハネたり、急に勢を落してハネるは悪し。

策は勒の筆法を真中にて切り、如き形あり。斜めに右上方に向つて軽く筆を收めり。策はむちうづの心あり。

掠リヤクは左拂又は撒ビツとも言ふ。すきいにて髪を掠むる

掠

啄

磔

如く勢いよく書くべし。掠はかすめり心あり。左より筆を入れ  
彎曲の氣味に幾分速かに筆を引くべし。收筆は  
上に巻く心ありべし。

啄は掠の短きが如く鳥の物を啄むに似て鋭く、更に  
一層速かふるを良しとす。左より筆を入れ極めて早く  
左下へハネふべし。掠は速かに引き、啄は速かにハネるなり。  
磔は捺又は波法とも言ふ。左より筆を入れ軽く  
おろし斜に右下へ引き下し、適當のところにて筆を止め  
更に力を入れておろし平に右へ筆勢を抜くべし。  
強いて勢いをつけ又は勢いと落す如きは不可なり。  
ハネ先きは上に向ひ又は下に向ふは惡し、稍や平に  
筆をぬくべし。

四體千字文

勅員外散

騎侍郎周

興嗣次韻

天地玄黃宇宙洪荒  
天地玄黃宇宙洪荒  
天地玄黃宇宙洪荒

天地玄黃宇宙洪荒

日月盈昃辰宿列張

日月盈昃辰宿列張

日月盈昃辰宿列張

日月盈昃辰宿列張

寒來暑往秋收冬藏  
寒來暑往秋收冬藏  
寒來暑往秋收冬藏  
寒來暑往秋收冬藏

閏餘成歲律呂調陽  
閏餘成歲律呂調陽  
閏餘成歲律呂調陽  
閏餘成歲律呂調陽



雲騰致雨露結為霜  
雲騰致雨露結為霜  
之得致雨露結為霜

金生麗水玉出崑岡  
金生麗水玉出崑岡  
金生麗水玉出崑岡  
金生麗水玉出崑岡

劍號巨闕珠稱夜光  
劍號巨闕珠稱夜光  
劍號巨闕珠稱夜光  
劍號巨闕珠稱夜光

果珍李柰菜重芥薑  
果珍李柰菜重芥薑  
果珍李柰菜重芥薑  
果珍李柰菜重芥薑

海鹹河淡鱗潛羽翔  
海鹹河淡鱗潛羽翔  
海鹹河淡鱗潛羽翔  
海鹹河淡鱗潛羽翔

龍師火帝鳥官人皇  
龍師火帝鳥官人皇  
龍師火帝鳥官人皇  
龍師火帝鳥官人皇

始制文字乃服衣裳  
始制文字乃服衣裳  
始制文字乃服衣裳  
始制文字乃服衣裳  
始制文字乃服衣裳  
始制文字乃服衣裳  
始制文字乃服衣裳  
始制文字乃服衣裳

弔民伐罪周發殷湯  
弔民伐罪周發殷湯  
弔民伐罪周發殷湯  
弔民伐罪周發殷湯  
坐朝問道垂拱平章  
坐朝問道垂拱平章  
坐朝問道垂拱平章  
坐朝問道垂拱平章  
坐朝問道垂拱平章  
坐朝問道垂拱平章

愛育黎首臣伏戎羌  
愛育黎首臣伏戎羌  
愛育黎首臣伏戎羌  
愛育黎首臣伏戎羌  
愛育黎首臣伏戎羌  
愛育黎首臣伏戎羌  
愛育黎首臣伏戎羌  
愛育黎首臣伏戎羌

鳴鳳在樹白駒食場  
鳴鳳在樹白駒食場  
鳴鳳在樹白駒食場  
鳴鳳在樹白駒食場  
鳴鳳在樹白駒食場  
鳴鳳在樹白駒食場  
鳴鳳在樹白駒食場  
鳴鳳在樹白駒食場

蓋此身髮四大五常  
蓋此身髮四大五常  
等法身契四大五常

蓋此身髮四大五常

恭惟鞠養豈敢毀傷

恭惟鞠養豈敢毀傷

恭惟鞠養豈敢毀傷

恭惟鞠養豈敢毀傷



女慕貞絜男效才良  
女慕貞絜男效才良  
女慕貞絜男效才良  
知過必改得能莫忘  
知過必改得能莫忘  
知過必改得能莫忘  
知過必改得能莫忘  
知過必改得能莫忘

罔談彼短靡恃已長  
罔談彼短靡恃已長  
罔談彼短靡恃已長  
罔談彼短靡恃已長

信使可覆器欲難量  
信使可覆器欲難量  
信使可覆器欲難量  
信使可覆器欲難量

墨悲絲染詩讚羔羊  
墨悲絲染詩讚羔羊  
墨心絲染詩讚羔羊  
墨悲絲染詩讚羔羊

景行維賢克念作聖  
景行維賢克念作聖  
景行維賢克念作聖  
景行維賢克念作聖

德建名立形端表正  
德建名立形端表正  
德建名立形端表正  
德建名立形端表正  
空谷傳聲虛堂習聽  
空谷傳聲虛堂習聽  
空谷傳聲虛堂習聽  
空谷傳聲虛堂習聽

禍因惡積福緣善慶  
禍因惡積福緣善慶  
禍因惡積福緣善慶  
禍因惡積福緣善慶  
禍因惡積福緣善慶  
禍因惡積福緣善慶  
禍因惡積福緣善慶  
禍因惡積福緣善慶  
禍因惡積福緣善慶  
禍因惡積福緣善慶

資父事君曰嚴與敬  
資父事君曰嚴與敬  
資父子君曰嚴與敬  
資父事君曰嚴與敬  
孝當竭力忠則盡命  
孝當竭力忠則盡命  
孝當竭力忠則盡命  
孝當竭力忠則盡命

臨深履薄夙興溫清  
臨深履薄夙興溫清  
臨深履薄夙興溫清  
似蘭斯馨如松之盛  
似索斯馨如松之盛  
似蘭斯馨如松之盛  
似索斯馨如松之盛

川流不息淵澄取映  
川流不息淵澄取映  
川流不息淵澄取映  
川流不息淵澄取映

容止若思言辭安定  
容止若思言辭安定  
容止若思言辭安定  
容止若思言辭安定



篤初誠美慎終宜令  
篤初誠美慎終宜令  
篤初誠美慎終宜令  
篤初誠美慎終宜令

榮業所基籍甚無竟  
榮業所基籍甚無竟  
榮業所基籍甚無竟  
榮業所基籍甚無竟

學優登仕攝職從政  
學優登仕攝職從政  
學優登仕攝職從政  
學優登仕攝職從政

存以甘棠去而益詠  
存以甘棠去而益詠  
存以甘棠去而益詠  
存以甘棠去而益詠

樂殊貴賤禮別尊卑  
樂殊貴賤禮別尊卑  
樂殊貴賤禮別尊卑  
樂殊貴賤禮別尊卑

上和下睦夫唱婦隨  
上和下睦夫唱婦隨  
上和下睦夫唱婦隨  
上和下睦夫唱婦隨  
上和下睦夫唱婦隨

外受傳訓入奉母儀  
外受傳訓入奉母儀  
外受傳訓入奉母儀  
外受傳訓入奉母儀  
諸姑伯叔猶子比兒  
諸姑伯叔猶子比兒  
諸姑伯叔猶子比兒  
諸姑伯叔猶子比兒

孔懷兄弟同氣連枝  
孔懷兄弟同氣連枝  
孔懷兄弟同氣連枝  
孔懷兄弟同氣連枝  
孔懷兄弟同氣連枝  
孔懷兄弟同氣連枝  
孔懷兄弟同氣連枝  
孔懷兄弟同氣連枝

仁慈隱惻造次弗離  
仁慈隱惻造次弗離  
仁慈隱惻造次弗離  
仁慈隱惻造次弗離  
節義廉退顛沛匪虧  
節義廉退顛沛匪虧  
節義廉退顛沛匪虧  
節義廉退顛沛匪虧  
節義廉退顛沛匪虧

性靜情逸心動神疲  
性靜情逸心動神疲  
性靜情逸心動神疲  
性靜情逸心動神疲  
守真志滿逐物意移  
守真志滿逐物意移  
守真志滿逐物意移  
守真志滿逐物意移

堅持雅操好爵自縻  
堅持雅操好爵自縻  
堅持雅操好爵自縻  
堅持雅操好爵自縻  
都邑華夏東西二京  
都邑華夏東西二京  
都邑華夏東西二京  
都邑華夏東西二京



背邛面洛浮渭據涇  
背邛面洛浮渭據涇  
背邛面洛浮渭據涇  
背邛面洛浮渭據涇  
宮殿盤鬱樓觀飛驚  
宮殿盤鬱樓觀飛驚  
宮殿盤鬱樓觀飛驚  
宮殿盤鬱樓觀飛驚

圖寫禽獸畫綵仙靈  
圖寫禽獸畫綵仙靈  
圖寫禽獸畫綵仙靈  
圖寫禽獸畫綵仙靈  
圖寫禽獸畫綵仙靈  
圖寫禽獸畫綵仙靈  
圖寫禽獸畫綵仙靈

肆筵設席鼓瑟吹笙  
肆筵設席鼓瑟吹笙  
肆筵設席鼓瑟吹笙  
肆筵設席鼓瑟吹笙  
肆筵設席鼓瑟吹笙  
肆筵設席鼓瑟吹笙  
肆筵設席鼓瑟吹笙  
肆筵設席鼓瑟吹笙

右通廣內左達承明  
右通廣內左達承明  
右通廣內左達承明  
右通廣內左達承明  
既集墳典亦聚群英  
既集墳典亦聚群英  
既集墳典亦聚群英  
既集墳典亦聚群英

杜豪鍾隸漆書壁經  
杜豪鍾隸漆書壁經  
杜柔鍾隸漆書壁經  
杜稟鍾隸漆書壁經  
府羅將相路俠槐卿  
府羅將相路俠槐卿  
府羅將相路俠槐卿  
府羅將相路俠槐卿

戶封八縣家給千兵  
戶封八縣家給千兵  
戶封八縣家給千兵  
戶封八縣家給千兵  
戶封八縣家給千兵  
戶封八縣家給千兵  
高冠陪輦驅轂振纓  
高冠陪輦驅轂振纓  
高冠陪輦驅轂振纓  
高冠陪輦驅轂振纓  
高冠陪輦驅轂振纓  
高冠陪輦驅轂振纓

世祿侈富車駕肥輕  
世祿侈富車駕肥輕  
世祿侈富車駕肥輕  
世祿侈富車駕肥輕  
世祿侈富車駕肥輕  
世祿侈富車駕肥輕  
世祿侈富車駕肥輕

磻溪伊尹佐時阿衡  
磻溪伊尹佐時阿衡  
磻溪伊尹佐時阿衡  
磻溪伊尹佐時阿衡  
奄宅曲阜微旦孰營  
奄宅曲阜微旦孰營  
奄宅曲阜微旦孰營  
奄宅曲阜微旦孰營



桓公匡合濟弱扶傾  
桓公匡合濟弱扶傾  
桓公匡合濟弱扶傾  
綺迴漢惠說感武丁  
綺迴漢惠說感武丁  
綺迴漢惠說感武丁  
綺迴漢惠說感武丁

俊义密勿多士寔寔寧  
俊义密勿多士寔寔寧  
俊义密勿多士寔寔寧  
俊义密勿多士寔寔寧  
晋楚更霸趙魏困橫  
晋楚更霸趙魏困橫  
晋楚更霸趙魏困橫  
晋楚更霸趙魏困橫

假途滅虢踐土會盟  
假途滅虢踐土會盟  
假途滅虢踐土會盟  
假途滅虢踐土會盟  
何遵約法韓弊煩刑  
何遵約法韓弊煩刑  
何遵約法韓弊煩刑  
何遵約法韓弊煩刑

起翦頗牧用軍最精  
起翦頗牧用軍最精  
起翦頗牧用軍最精  
起翦頗牧用軍最精  
起翦頗牧用軍最精  
起翦頗牧用軍最精  
起翦頗牧用軍最精  
起翦頗牧用軍最精

九州禹蹟百郡秦并  
九州禹跡百郡秦并  
九妙禹迹百郡秦并

嶽宗恒岱禪主云亭  
嶽宗恒岱禪主云亭  
嶽宗恒岱禪主云亭  
嶽宗恒岱禪主云亭

鴈門紫塞雞田赤城  
鴈門紫塞雞田赤城  
鴈門紫塞雞田赤城  
鴈門紫塞雞田赤城

昆池碣石鉅野洞庭  
昆池碣石鉅野洞庭  
昆池碣石鉅野洞庭  
昆池碣石鉅野洞庭

曠遠繇邈巖岫杳冥  
曠遠繇邈巖岫杳冥  
曠遠繇邈巖岫杳冥  
曠遠繇邈巖岫杳冥  
治本於農務茲稼穡  
治本於農務茲稼穡  
治本於農務茲稼穡  
治本於農務茲稼穡  
治本於農務茲稼穡

俶載南畝我藝黍稷  
併載南畝我藝黍稷  
什茲南畝永藝黍稷  
俶載南畝我藝黍稷  
稅熟貢新勸賞黜陟  
稅熟貢新勸賞黜陟  
稅熟貢新勸賞黜陟  
稅熟貢新勸賞黜陟  
稅熟貢新勸賞黜陟



孟軻敦素史魚秉直  
孟軻敦素史魚秉直  
孟軻敦素史魚秉直  
孟軻敦素史魚秉直  
孟軻敦素史魚秉直  
孟軻敦素史魚秉直  
孟軻敦素史魚秉直

聆音察理鑒貌辨色  
聆音察理鑒貌辨色  
聆音察理鑒貌辨色  
聆音察理鑒貌辨色  
聆音察理鑒貌辨色  
聆音察理鑒貌辨色  
聆音察理鑒貌辨色  
聆音察理鑒貌辨色

省躬譏誠寵增抗極  
省躬譏誠寵增抗極  
省躬譏誠寵增抗極  
省躬譏誠寵增抗極  
省躬譏誠寵增抗極  
省躬譏誠寵增抗極  
省躬譏誠寵增抗極  
省躬譏誠寵增抗極

兩疏見機解組誰逼  
兩疏見機解組誰逼  
夏流見機解組誰逼  
兩疏見機解組誰逼

索居閑處沈默寂寥  
索居閑處沈默寂寥  
索居閑處沈默寂寥  
索居閑處沈默寂寥

求古尋論散慮逍遙  
求古尋論散慮逍遙  
求古尋論散慮逍遙  
求古尋論散慮逍遙  
求古尋論散慮逍遙  
求古尋論散慮逍遙  
求古尋論散慮逍遙  
求古尋論散慮逍遙

渠荷滴瀝園芥抽條  
渠荷滴瀝園芥抽條  
渠荷滴瀝園芥抽條  
渠荷滴瀝園芥抽條  
枇杷晚翠梧桐彫  
枇杷晚翠梧桐彫  
枇杷晚翠梧桐彫  
枇杷晚翠梧桐彫  
枇杷晚翠梧桐彫  
枇杷晚翠梧桐彫

陳根委翳落葉飄飊  
陳根委翳落葉飄飊  
陳根委翳落葉飄飊  
陳根委翳落葉飄飊  
陳根委翳落葉飄飊  
陳根委翳落葉飄飊  
陳根委翳落葉飄飊  
陳根委翳落葉飄飊  
陳根委翳落葉飄飊  
陳根委翳落葉飄飊

耽讀翫市寓目囊箱  
耽讀翫市寓目囊箱  
耽讀翫市寓目囊箱  
耽讀翫市寓目囊箱  
耽讀翫市寓目囊箱  
易輶攸畏屬耳垣墻  
易輶攸畏屬耳垣墻  
易輶攸畏屬耳垣墻  
易輶攸畏屬耳垣墻  
易輶攸畏屬耳垣墻



具膳滄飯適口充腸  
具膳滄飯適口充腸  
具膳滄飯適口充腸  
具膳滄飯適口充腸  
飽飫烹宰飢厭糟糠  
飽飫烹宰飢厭糟糠  
飽飫烹宰飢厭糟糠  
飽飫烹宰飢厭糟糠

親戚故舊老少異糧  
親戚故舊老少異糧  
親戚故舊老少異糧  
親戚故舊老少異糧

妾御績紡侍巾帷房  
妾御績紡侍巾帷房  
妾御績紡侍巾帷房  
妾御績紡侍巾帷房

紈扇圓潔銀燭煒煌  
紈扇圓潔銀燭煒煌  
紈扇圓潔銀燭煒煌  
紈扇圓潔銀燭煒煌  
畫眠夕寢藍筍象床  
畫眠夕寢藍筍象床  
畫眠夕寢藍筍象床  
畫眠夕寢藍筍象床  
畫眠夕寢藍筍象床  
畫眠夕寢藍筍象床

弦歌酒醺接杯舉觴  
弦歌酒醺接杯舉觴  
弦歌酒醺接杯舉觴  
弦歌酒醺接杯舉觴  
矯手頓足悅豫且康  
矯手頓足悅豫且康  
矯手頓足悅豫且康  
矯手頓足悅豫且康  
矯手頓足悅豫且康  
矯手頓足悅豫且康

嫡後嗣續祭祀蒸嘗  
嫡後嗣續祭祀蒸嘗  
嫡後嗣續祭祀蒸嘗  
嫡後嗣續祭祀蒸嘗  
嫡後嗣續祭祀蒸嘗  
嫡後嗣續祭祀蒸嘗  
嫡後嗣續祭祀蒸嘗  
嫡後嗣續祭祀蒸嘗

賤牒簡要顧答審詳  
抄捺首安厥差室浮  
賤牒簡要顧答審詳  
骸垢想浴執熱願涼  
骸垢想浴執熱願涼  
骸垢想浴執熱願涼  
骸垢想浴執熱願涼

驢騾犢特駭躍超驤  
驢騾犢特駭躍超驤  
驢騾犢特駭躍超驤  
驢騾犢特駭躍超驤  
驢騾犢特駭躍超驤  
誅斬賊盜捕獲叛亡  
誅斬賊盜捕獲叛亡  
誅斬賊盜捕獲叛亡  
誅斬賊盜捕獲叛亡  
誅斬賊盜捕獲叛亡

布射遼丸嵇琴阮嘯  
布射遼丸嵇琴阮嘯  
布射遼丸嵇琴阮嘯  
布射遼丸嵇琴阮嘯

恬筆倫紙鈞巧任鈞  
恬筆倫紙鈞巧任鈞  
恬筆倫紙鈞巧任鈞  
恬筆倫紙鈞巧任鈞



釋紛利俗並皆佳妙  
釋紛利俗並皆佳妙  
釋紛利俗並皆佳妙  
釋紛利俗並皆佳妙

毛施淑姿工嘖妍笑  
毛施淑姿工嘖妍笑  
毛施淑姿工嘖妍笑  
毛施淑姿工嘖妍笑

年矢每催羲暉朗曜  
年矢每催羲暉朗曜  
年矢每催羲暉朗曜  
幸夫每催羲暉朗曜

璿璣懸幹晦魄環照  
璿璣懸幹晦魄環照  
璿璣懸幹晦魄環照  
璿璣懸幹晦魄環照

指薪脩祜永綏吉劬  
指薪脩祜永綏吉劬  
指薪脩祜永綏吉劬  
指薪脩祜永綏吉劬

矩步引領俯仰廊廟  
矩步引領俯仰廊廟  
矩步引領俯仰廊廟  
矩步引領俯仰廊廟

束帶矜莊徘徊瞻眺  
束帶矜莊徘徊瞻眺  
束帶矜莊徘徊瞻眺  
束帶矜莊徘徊瞻眺  
束帶矜莊徘徊瞻眺  
束帶矜莊徘徊瞻眺  
束帶矜莊徘徊瞻眺

謂語助者焉哉乎也  
謂語助者焉哉乎也  
謂語助者焉哉乎也  
謂語助者焉哉乎也



昭和丙子暮春

洗心堂千圃書



變體假名

イイ以伊 ○ 口ろ路 ○ ハは  
波をを ○ ニにふよ ○ ホほ  
月不 ○ へへ魚 ○ トとと ○  
チちち ○ リりり ○ 又奴

ぬ○ルるる○ヲを越○ワ  
わ○カか○りり○ヨよと  
○タたふし○しれ連○れ  
○ソそ持○つつ○はは  
木ね祓○十なふね○ラ

ら羅○ムむせ○ウう  
る○井ぬ井○の乃  
れ若○オおた○クく  
見○ヤや○マまぬ  
○ヶけ○フふぬ○コこ

古○エえ江○テていふ○ア  
 あら○サヤきくは○キキ、  
 ○エゆほ○メめえん○ミみい  
 ○シし志○エ急い○ヒひむ  
 ○モもも○セせさ○スすさ

千字文畧解

上段文字の右傍に附したる假名は、音の讀方。  
 左傍に附したる假名は訓讀(普通の讀方)なり。

龍師火帝	海鹹河淡	果珍李柰	劍號巨闕	金生麗水	雲騰致雨	閏餘成歲	寒來暑往	日月盈昃	天地玄黃
支那上古の伏羲氏の時龍馬圖を負ひて出づ、伏羲を龍師といふ義人氏は火食の初め故火帝と稱す。	水は海の水と河の水とあり、海水はしほからく、河水はあはく鹽氣なく淡泊である。	果物は地に生ずる草木の實なり。其中にても、李と柰とは最も珍らしきものなりといふ。	鎧の國の寶とする名劍を巨闕と稱すれど、もとは地中より産する鐵にて鍛え作りたるものなり。	晋支那の麗水といふ河の水中より多くの沙金を出せし事有る故に、金は麗水より生ずといふ。	地上の水氣が空にのぼりて雲となり、冷氣にあひて雨となり、再び地上に降り來ることなり。	閏は閏月にて四年目に一度あり、この餘りありて一年の日を定められしことをいふ。	寒さ來れば暑きはゆき、春夏秋冬は常に循環してゐる事にて、一年の移り變りを云ふなり。	盈とは月光の滿つること、昃とは日の西に傾くことにて、日は西に傾き月は缺けて滿つるなり。	天は玄、地は黃なり。玄は黒く、黃は黃色なり、この言葉は天地の色を示せるものなり。
鳥官人皇	鱗潜羽翔	菜重芥薑	珠稱夜光	玉出崑崗	露結爲霜	律呂調陽	秋收冬藏	辰宿列張	宇宙洪荒
鳥官とは少昊氏の時に鳳凰出でしより名づけ官とす、人皇は天皇地皇の中の久皇氏なり。	魚類は水中に潜みすみ、鳥類は空中を飛び樹上に棲む、鱗は魚類、羽は鳥類の事なり。	又、野菜も地に多く生ずれど、支那にては芥子と薑とを特に第一として重んずなり。	又、有名なる寶珠夜光の珠も海中の地より出でたるものなり。	崑岡とは崑崙山、山中より水晶、瑪瑙などの寶玉を多く産出す故に、玉は崑岡より出づといふ。	陽氣が涼しくなれば空中の水氣が露になり、露が寒氣にあひ凝り結ばりて霜となるをいふなり。	律呂とは音樂の調子なり、音樂の調子を氣節に配して、天地間の陽氣を調へるたるをいふ。	陽氣が涼しくなれば空中の水氣が露になり、露が寒氣にあひ凝り結ばりて霜となるをいふなり。	辰は天の十二宮、宿は二十八宿共に星の事なり、列張とは共に天に列り懸るをいふなり。	宇宙は天地の間にして、洪は大、荒は廣き事なり天地間の大きく廣きを現はせし言なり。

勅員外散騎侍郎周興嗣次韻

勅員外散騎侍郎は、支那の昔の唐時代の官職名にて、其官の周興嗣が、他の文の韻をふみて作れり



始制文字	推位讓國	弔民伐罪	坐朝問道	愛育黍首	遐邇壹體	鳴鳳在樹	化被草木	蓋此身髮	恭惟鞠養	女慕貞潔	知過必改	罔談彼短
上古は文字なく繩を結びて記したるが、蒼頡といふ人、鳥の足跡を見て始めて文字を制作す。	世の進むにつれ、仁義道徳を重んじ、聖人出で位を推し、國を讓りて世の中を治められたり。	弔とは恤み慰め、伐とは罪ある者を伐つなり、即ち暴虐なる君を伐ち人民を苦しめより救ふ事なり	朝は朝廷にして政治を議する所、天子は群臣と天下の治る道を相談りて政を治め給へるなり、	黍首とは萬民をさして云ふ、即ち人民を愛しみ給ひて安んじ居らるゝ意なり。	遐は遠き國なり。邇は近き國にて、遠き國及近き國の人々も一體となりて聖君になづき給ふ事なり	天下は泰平となり、鳳凰出でて木に鳴く。聖君の徳ますく世に弘まりて其の瑞光の現れをいふ。	かくの如く世の中は治り、人民は安んじ、鳥獸は勿論一木一草に至るまでその徳が及びたり。	孝經に、身體髮膚之を父母に受くとあり、蓋し思ふに此我が身は父母より受けたる大切なるもの。	うやうやしく、謹みて、父母が此身を養育し給へる、大恩をもひ、片時も忘るべからず。	貞潔は貞操潔白の意にて、すべての婦人はこの行ひを慕ひ、苟くもこれに背かざらんことを期し。	凡そ人としては誰も必ず過ちなきを保し難し、故に若し過ちと知りたる上は必ず速かに改むべき也	彼とは己れ以外の他のすべての人をいふ。他人の短所缺所を知るとも必ず己れの口より口外するな
乃服衣裳	有虞唐陶	周發殷湯	垂拱平章	臣伏戒羗	率賓歸王	白駒食場	賴及萬方	四大五常	豈敢毀傷	男效才良	得能莫忘	靡特己長
其後次第に世の中が進み、人皆な衣服を作り、着するに至れりといふ。	帝堯陶唐氏は舜を推して帝位に即かしめ、帝舜有虞氏は禹を擧げて國を讓られしといふ。	發とは周の武王の御名、湯とは殷の湯王なり、殷の紂玉の無道。夏の桀王の惡行を共に亡ぼせり。	垂とは衣を下にたゝること、拱とは手をこまねきたる形、即朝が垂拱して百官を平に章にするなり	戎羗は西の方エビスの國なり、エビスの國までも其の徳を慕ひ來り、臣民としてつかふることなり	普天の下、率土の濱、即ち國內のはてまでも、王の威徳になづき歸伏せられたるものをいふ。	白き駒が出でて牧場に食を安んじに求む、即ちその徳が鳥獸までも及べるをいへるなり。	國內の幸は云ふに及ばず、遂には國外までも、幸福にみち／＼たる事をいふ。	四大は、地水火風をあつめて一身となりたるをいふ、仁義禮智信の五常をまもりて身を立るなり。	故に、如何にして此の大切なる身を、きづつけやぶる如きふるまひ、ありてなるべきぞ。	又男子は才能あるもの善良なるものを手本として偶にも惡しき行ひを爲すべからずと戒めたり。	能とは、人の必ず行ふべき道理にして、此を知り得たれば、決して忘るべからざるをいふ。	己自身の長所、乃ち得意とする事を、自慢し、をこりほこることはならぬ、と戒めたるなり。

信使可覆	墨悲絲染	景行維賢	德建名立	空谷傳聲	禍因惡積	尺璧非寶	資父事君	孝當竭力	臨深履薄	似蘭斯馨	川流不息	容止若思
信とは眞實なり、一旦人と約束したることは、必ず實行して、背き覆す事なきを期すべきなり。	墨子といふ賢人は、白き絲の種々の色に染るを見て、人も悪友に交れば惡に染るを知りて悲めり。	景とは大なるなり、又明らかなり、大に明かなる行ひある人は、必ず維れ賢人であると云ふ。	人が徳を行へば、其の善行自ら世に知られ、隨つて其の名も、亦た世に著はるを云へり。	空谷、即ち谷の中にて、聲を發すれば、こだまとなりて、其の聲の傳へ應ずるが如く。	人の禍を被むるは、己れが惡しき行ひの積りし結果なれば、平素に惡しき行ひなきやう慎むべし。	一尺もある程の玉は、世界に稀なるものなれども、決して賞ふべき寶にはあらずといへり。	これ孝經の句にして、父母に事ふるの道を以て、君につかへまつれば、忠臣と稱せらるべし。	孝とは、己れの方の及ぶ限り父母の教訓を守り、法に背かず行ひを正しくして、奉養するをいふ。	忠孝の道は廣しみて行ひ、宛も深き淵に臨むが如く薄き氷を履むが如く、小心翼翼とあるべきなり	忠孝の道を盡さんには、たとへば、幽谷に生ずる蘭の、馨しく芳香を放つがごとく。	忠孝は川の水の流れる如く、やまらずやまらず常に怠る事なくつくすべし。	姿、形は端正にして、美しきをよしとすれど、その如く常に物辭かにふるまふをよしといふ。
器欲難量	詩讚羔羊	克念作聖	形端表正	虛堂習聽	福緣善慶	寸陰是競	日嚴與敬	忠則盡命	夙興溫清	如松之盛	淵澄取映	言辭安定
器とは人の器量なり自身の器量を人に見すかされぬやうはかりがたくせよ奥床しければ畏敬を受く詩經に、丈夫の羊羔が高位にありながら、羊の姿を着て節儉なりと、ほめたゝへる詩あり。	古の聖人の言行をよく思ひ學び、それに倣ひて修養を忘れざれば、其の人も聖人となるを得べし。	人の形容が端正なれば、其の表即ち影も正しく映る、行ひ正しければ他よりまがれることを受ず。	何物もなきうちひらきたる廣き堂にて音を發すれば、其の響は滿堂に聞えて答ふる聲あるが如し。	人の幸福を得るは、善事を行ひたる賜ものなれば日常勉めて善き行を爲すべし、とのことなり。	僅かなる光陰をも惜みて怠らず勵めば、萬事成らざることなし、是れこそ眞の寶といふべきなり。	君に事ふるの道は、如何に心得べきかといふに、おごそかにしていつくしみうやまふことあり。	忠とは我が一身一家を顧みず、身を命を抛ちて、君を重んじ誠實に身をさゝげて奉仕するを云ふ。	忠孝を守る者は、朝早く起出でて君父の安否を尋ね、冬はあたゝかに夏は涼しきやう注意すべし。	松の青々として、丁々と高く枝葉の繁茂するが如くに、人に仰がれ慕はれるべし。	又淵の水は澄めば、いろ／＼の影のうつるが如くに何事にも飾りをすて眞心を盡し行へといふ。	又言葉は安らかに靜かに、常におちつき、決して輕躁ならぬやうに、穩かにあるべしといへるなり	

篤初誠美	榮業所基	學優登仕	存以甘棠	樂殊貴賤	上和和睦	外受傳訓	諸姑伯叙	孔懷兄弟	交友投分	仁慈隱惻	節義廉退	性靜情逸
一事一業をするには、最初によく注意を加ふれば、その事業は有終の美を成すべし。	榮業とは官途に就くことにして、以上述べたる如く身の行ひを正しくするは、立身の基ひである。學問が衆人に優れたる人は、仕官なしても、立身が容易である故に、よく勉強すべし。	周の時代、召公が生存中に甘棠の下にて政を聽き萬民その徳慕に浴したる如く。	昔の音楽は、天子、諸侯、士大夫、庶民と種々の區別があり各々その身分によりて樂しめるなり。天下は安らかに國はよく治り、君は臣を愛くし、臣は君を敬ひて、上下和睦じかりしをいふ。	男子は外に出でては師の訓へを受けて、よくこれを守つてをいふ。傳とは守役のこと。	諸姑とは父の姉妹、乃ち「をば」をいひ、伯叔とは父の兄弟、乃ち「をぢ」をいふ。	孔ははなはだにて、兄弟は特に親しみ愛しみ、不和をなすなどの意なり。	常に交はる友達は、その分によりて、意氣の相合ふ者をえらぶべきなり。	仁慈は、めぐみを廣くし、愛を人になすなり、隱惻とは物をいたむなり、乃ち同情心の強を謂ふ。	節義とは、みさをの正しきをいふ、廉とはおごらずむさばらぬといふ、退はへりくだり禮を守る。	人の性質はおちつきて靜かなるは、その情ものびやかなり、又自らか安らかなるべし。		
慎終宜令	籍甚無竟	攝職從政	去而益詠	禮別尊卑	夫唱婦隨	入奉母儀	猶子比兒	同氣連枝	切磨箴規	造次弗離	顛沛匪虧	心動神疲
又その初めばかりでなく、終りを慎しみて鄭重にする時は、其の結果は必ず善良であるべし。	をすればその譽れは、限りなく傳へられ、後世までも人のほめものとなるべしといふ。	されば官途に就けば、遂に重要な位置を占め、其責任者となりて國政に對ふべきなり。	死したる後は、甘棠伐つなかれの句の如く、まず其徳を謳歌せらるべきなり。	又、冠、婚、喪、祭の諸儀式も上下の區別があり整然として訓ひ、決して混同せざりしなり。	又一家に於ても、夫は妻をみちびき、妻は夫に隨ひ、よく夫婦和合をすることをいふ。	又家において、母の教へをよく守りて、よく母につかへ、これを遵ぶべきなり。	猶子とは「をひ」「めい」をいふ。「をい」「めい」は吾が子と同様に愛くしめといふなり。	兄弟は父母の同氣をうけて生れたれば、形を異にすといへど、一木に生じたる枝葉の如し。	造次とは、少しの間のことなり、しばしのうちに仁心をはなさぬやうにせよとの事なり。	顛沛とは物の倒るゝ間をいふ、乃ちつかの間も、節義廉退のかけぬやうにせよといふなり。	心定まらず、動きやすき時は、其行にも輕躁にして、精神の最も疲れ勞るゝものなり。	

守眞志滿	堅持雅操	都邑華夏	背邨面洛	宮殿盤鬱	圖寫禽獸	丙舍傍啓	肆筵設席	升階納陛	右通廣內	既集墳典	杜藁鐘隸	府羅將相
人道の眞を明かならしめ、道を守る人は、志も固らかに満足を得らるべし。	堅く正しきみさを保ちまもり、この美德を離さざる時は、自然に世に知られ、尊敬せらる。	都邑とは、都會繁華の地をいふなれど、こゝには王城の地といふ。華夏とは支那の國をいふ。	東の都洛陽は、北は北邨山を負ひ南は洛川に臨み山河襟帶の好位置にあり。	皇都洛陽及長安に造營せられたる宮殿は、盤桓とひろがり、鬱乎とし建ちつらなりたり。	其宮殿の梁又は楹には、鳥獸の形を現はし、彫り刻み、種々の名畫を寫したり。	又丙舎とて宮殿の内にある家には、門のかたはらを開きて通えるやうに造られたり。	斯る莊嚴なる宮殿に於て、諸侯を招き席を設けて宴を賜はることあり。	召されし諸侯百官は、階をのぼり、陛に入りて、宮中に入るもの引きも切らず。	宮殿は廣大にして、建て列らなり、右に行けば、廣内といふ宮殿に通じ。	墳典とは、三墳五典といへる古き書物にして、宮殿には左の書籍が澤山に集め寄せられてある。	漢の丞相たる杜操は、始めて草書を作り、鐘隸は魏につかへし人、始めて隸書を作りたり。	府とは政府のこと、政府は大将また宰相などの百官がつらなり政事を執れり。
逐物意移	好爵自縻	東西二京	浮渭據涇	樓觀飛驚	畫彩仙靈	甲帳對楹	鼓瑟吹笙	弁轉疑星	左達承明	亦聚群英	漆書壁經	路俠槐卿
又事物の變遷を見て、惑ふて動くものは、志も常に變りて、定まらぬものなり。	官爵は勿論、欲し求むるもの求めざるものも、自ら來り集り身にまとはるべきなり。	東西二京とは、支那の二つの都にて、洛陽は東にあり、長安は西にあり。	西の都長安は、渭水に面し涇川に據りて、洛陽と共に有名なる王城の地なり。	其の中の樓觀(物見臺)は遙かに高く聳え立ち、人をして空中に飛べるかと思はしめたり。	又障子、襖にも、神仙の像をえがき、その裝飾の美、構造の莊嚴は實に稱讚せらるものなり。	甲帳とて、美しきとばりは、金玉の柱に對して、美しき、眼もさびるばかりなり。	その際には瑟といふ大なる「こと」を弾きならし、笙といへる笛などを吹き、歡興を添へしめたり。	その參列をみるに、辨とて冠を冠り、綺羅を飾りその輝く姿は、天上の星かと疑はる。	左すれば、承明殿に達す、この二句は宮殿の如何にも廣大なる事を示せるなり。	又、そののみならず、古今東西の世にすぐれたる物を多く、一堂に收められたり。	漆書壁經とは漢の靈帝が石壁中より得たる漆をもつて書きたる六經のことなり。	道路には、三公九卿の車馬絡繹とならび續きたりといふことなり。

戸封八縣	高冠陪輦	世祿侈富	策功茂實	籛雞伊尹	奄宅曲阜	桓公匡合	綺回漢惠	俊父密勿	晉楚更霸	假途滅虢	何遵約法	起翦頗牧
戸とは民の家なり八縣とは八縣の邑なり、乃ち功ある臣には八縣の土地を與へ功勢に報ひ。	高位高官は、衣冠にて、天子の風輦に陪從す、(此句及次句は儀杖のさまを言ひたり)	代々祿をたまはるを、世祿といふ、先祖より承けた祿ゆえに、子孫は富み榮え、侈りに長ず。斯の如く功勳ある人々の富貴を極むる故、これを見て、勳功偉勳を立つるもの多く出で来る。	籛漢は、昔周の文王に擧げられし、太公望が釣を垂し處、伊尹は股の湯王の臣なり。	曲阜は魯の地名、周公旦の封ぜられし處、周公は此地に大なる宮殿を造り周八百歳の基を開く。	齊の桓公は、多くの諸侯と會し、覇者となり、周の天子を輔佐して天下の亂を治めんとし。	綺は綺里手漢の四賢の一人、惠帝が末だ太子の折殺せられとせしを、諷諫して回復せし人。	俊父は千百人にすぐれたる人をいふ、密勿は親むの意、賢君は才智の人を擧げて親任せらる。	晉の國と楚の國ははる／＼覇業を争ひ、常に他の諸侯の、君主たらんとして競へり。	晉の獻公は虢の國に道をかり、虞を討ち、その歸途虢の國をも遂に亡したり。	漢の高祖の臣蕭何は、高祖天下を定めし時、苛法を除き、法を三章に爲して國大に治まれり。	起は自起、翦は王翦、共に秦の國の將軍なり、頗は廉頗、牧は季牧、共に趙の國の將軍なり。	
家給千兵	驅轂振櫻	車駕肥輕	勒碑刻銘	佐時阿衡	微旦執營	濟弱扶傾	說感武丁	多士寔寧	趙魏困橫	踐土會盟	韓弊煩刑	用軍最精
又いさほしある臣には八千人の兵士を賜ひ、守護せしめ、其の所屬をして指揮せしむ。	轂は車、乃ち車を驅らせ、冠の紐を振り、意氣揚々として供奉せり。	其の乘る所の馬は肥え太り、着する衣裳は輕るやかにして華美に流れたり。	又勳功ある人は、生前富貴をなし、死後に至りても、之を碑石に刻み銘を書し後世に傳へしむ。	佐時は、時を佐くる意、阿衡は伊尹の官名なり、共に無道の君を亡ぼし人民を助けし賢人。	此時周公旦なかりせば、かゝる大宮殿をたれが建つるものありしかとの意味なり。	傾き倒れんとする、弱き國の諸侯を助け、天下の覇長たるの實を擧ぐ。	又殷の傳説に曰く、高宗武丁が夢により感じ、政務を托させられし忠良の臣なり。	故に、濟々なる多士とて、人才多く集ひ、政を執るため、天下は誠に平穩無事なり。	趙の國と魏の國とは、合縱の策を立て秦に抗せしも反つて秦の國の連横の計に苦しめらる。	晉の文公は踐土に諸侯伯會しを、相一致して周天子を敬ひ朝貢を怠らざらん事を盟せしことあり。	韓非は秦の大將たる時、さま／＼の苛酷なる法令を布きしかば、其法の煩はしさに國は疲れたり。	以上四人の將軍は、智謀策畧に勝れ、軍兵を用ひる事に精しく、戰へば勝つと云ふ良將なり。

宣威沙漠	九州禹跡	嶽宗恒岱	鴈門紫塞	昆池碣石	曠遠繇邈	治本於農	倣載南畝	稅熟貢新	孟軻敦素	庶幾中庸	聆音察理	貽厥嘉猷
されば威名は四海に輝き、武勳は天下に轟き、遠く沙漠のはてまでもおよべり。	禹王は九州に巡りて水利の便を計り農業を勤む、九州とは冀、遼、青、徐、揚、荆、豫、梁、雍なり。	嶽は山にして、山は恒山と岱山の兩山をもつて、天下の名山とす、この山南面せる故人君にたとふ。	岱山は、鳥も飛び越すを得ず、山中一ツ缺けたる所を鴈の過る故鴈門の名あり、紫塞は萬里の長城	昆池は、昆陽と稱する有名なる池、碣石は有名なる山なり、共に著名なる池と山をいふ。	以上に記せる原野、湖水其他名所古蹟は、ひろく遠く遙かに連らなれり。	國を治むる者は、まづ農業をもつて本とす。乃ち農は國を建つる基礎なり。	倣は始めてたり、始めて日當りのよき南向の田畝に耕作なして。	よく買りたる五穀はその稜分を租税として、新らしきものを貢として奉るは農家の務である。	孟軻は世に名高き賢人孟子なり、孟子は性質厚くして、すなほなる人なり。	中とはかたよらぬこと、庸とは常にかはらぬこと此の中庸をこひねがひ望みて之を得	音聲を聞きて其人の道理をよく察し知り、何事にも注意怠たるなどの意。	嘉猷とは、よき計ごとにて、人道を守りて、よく一家を經營する計畫を子孫にのこし。
馳譽丹青	百郡秦并	禪主云亭	雞田赤城	鉅野洞庭	嚴岫杳冥	務茲稼穡	我藝黍稷	觀賞黜陟	史魚秉直	勞謙謹勅	鑑貌辨色	勉其祗植
かゝる故に、其像は畫かれ、其の功は記されて、麒麟圖に殘され、譽れを後世に傳へらる。	秦の始皇は、六國を亡ぼし、天下を一統するに至り、六國を一百郡にわかちたり。	禪は封禪とて、天子巡狩して、祭りあるをいふ、云亭は云々山、亭々山とて二ツの山なり。	雞田は古驛の名、霍河山の北にあり、赤城とは、周時代の臨所の有りたる跡をいふ。	鉅野とは、鉅鹿と稱する廣き原野にて、洞庭は楚と吳の國の間にある湖水なり。	嚴岫はけはしき山、高く大なる山は遙に遠く散在して、幽かに見えかくれるをいふ。	故に務めて稼穡の道を怠らざらんことを期す、稼は五穀を植ふ、穡は五穀をかり取るをいふ。	我は、きびやあはなどの穀物の種子をまき植へて農事に勉め勵み怠らざらん事いへるなり。	故にその業を勵ますには賞を以てし、その勤怠によつて、或は位を授け又しりぞくるなり。	又衛の太夫史魚は、少しもまがりなき實直の人なり。秉直とはまがらず、すなほなること。	勞謙とは、もつばら人にへりくだり譲り、謙勳とは、其言行をつゝしみ、方正實直なるなり。	又その容貌を見て、其人の喜怒愛樂の情を辨別せよ、何事にもその善惡を見分けよとの意。	又その身に仁義忠孝の道を守りて、勉めて身を立て家を興せよとの教へなり。

省躬謙誠	殆辱近耻	兩疏見機	索居閑處	求古尋論	欣奏累遣	渠荷的歷	枇杷晚翠	陳根委翳	遊鷗獨運	耽讀翫市	易輜攸畏	具膳餐飯
自から常にかへりみて、過ちなきやと心がけ、事々物々に注意して慎しみ戒むべきなり。	君の寵愛ふかく、高き位につかへる時は人のねたみ多く、耻辱の身に及ぼす事多し。	漢の時疎廣、疏受といえる父子あり、父は足る事を知れば危からず、子は功成名遂退は天の道也閑静なる所に住居を卜し、心をしづかにもち、世の富貴榮華にあこがれずかくれ居るなり。	古への書を讀みて古人の道を尋ね、それを論じ研究し、天眞の樂しみに世をすこせば。	かく在れば、心よろこばしく、世のわづらはしきこといつしか皆去りつくすべし。	渠とは溝の流れ、荷は蓮なり、的歷とはあざやかなり、乃ち溝の中に咲きたる蓮も鮮かに美しく、枇杷はさまで見どろなき木なれど、冬になれども葉の色はかはらず緑なり。	陳根はふるき根、委翳はすたれかゝる、即ち古き根はいつかすたれしほみ。	鷗といふ大なる鳥は思ひのまゝに空中を獨り舞ひ翔けめぐる。	その昔王氏は外に出で、書肆の店頭ゆき、讀書に耽りたる如くにて。	易輜とはかるんしきこと、何事も輜卒に扱はざる事かるはずみは最も畏れ慎しむ所なり。	飲食なす時は必ず膳をそなへて禮儀よくすべし、食事は禮を缺きな事あるべからず。		
寵増抗極	林阜幸即	解組誰逼	沈默寂寥	散慮逍遙	感謝歡招	園莽抽條	梧桐早凋	落葉飄颻	凌摩絳霄	寓目囊箱	屬耳垣墻	適口充腸
君の寵愛が増す時は、おごりたかぶる心いづるなり、よく其の程を注意すべし。	そのときには、速かに身を退き、山林の間に隠れるときは禍をまぬかるべし。	と云ふ父子病と稱し印授を解き隱遁せり、これ誰に逼られしにもあらず、自からなせしなり。	世の中と交り絶ち、ことば少なく沈黙を守り、のどかに樂しむをよしとす。	世の煩はしき思慮を散じ、おもいのまゝに遊びたのしむなり。	されば憂うる事は謝しさり、ただ喜ばしき事のみ招かずとも自然に来るべきなり。	園のうちにしげれる草も、枝のぬきんで、一面に青々と茂り生ふは清らかなり。	青桐は他の木よりすぐれて大なる葉なれども、秋來りなは早く凋み落つるなり。	おち葉は風にひるがへり散りさる。以上は秋の物淋しさを現はせしなり。	絳霄は、赤き色を現す日暮の大空はり。鷗はこの大空を凌ぎ高く飛びかける様をいふ。	入りては書物の入りたる袋又は箱に眼をさらしひたすら文學を研究し他を顧りみざりし。	又諺に曰く壁に耳ありといへり、人無き所にもその言行は慎しむべきなり。	食物は珍膳美味を好まず、口に適すものなれば足る又腹にたればよしとす。

飽飫烹宰	親戚故舊	妾御績紡	紈扇圓潔	晝眠夕寐	絃歌酒讌	矯手頓足	嫡後嗣續	稽顙再拜	牋牒簡要	骸垢想浴	驢驛犢特	誅斬賊盜
腹みちてあきたる時は、如何なるうまさきものも、飽きて食することを欲せず。	親類や、舊知は互に往來し音信なして其交情を温め親密なるべし。	妾とはメカケ、御は取扱ふ事、妾は妻より賤しきものにて、糸をとり糸をつむぐ事を扱ふ。	紈扇は絹地の團扇なり、その形はまるく白くあざやかなるものなり。	晝眠むければ眠り、夜ねむれば寝ね、そして眠りたり寝ねたりするには	絃は琴、琵琶の類、この樂器を鳴らし奏して詩を吟じ、酒宴を催して、	酒宴には、手をあげ足をうごかし、拍子をとりに舞ひおどり歡樂をつくす。	嫡とは惣領息子なり、父の後をうけ一家を相續するものなり。	稽顙とは頭を地につける事、祖先の祭には頭を地につけ、二度禮拜することなり。	牋牒は書札のことなり、手紙を書くには、なるべく簡單に要を得る様書くものなり。	身體に垢つきたる時は、湯あみして洗ひ落し、さつぱりとしたく想ふなるべし。	驢驛はうさぎ馬、犢とは小さき牛、特は豕の子なり、家畜類の事をいふ。	わるき事なす者、盜人捕へ、人を害する者は斬り殺す。
飢厭糟糠	老少異糧	侍巾帷房	銀燭燁煌	藍筍象床	接杯舉觴	悅豫且康	祭祀蒸嘗	悚懼恐惶	顧答審詳	執熱願涼	駭躍超驤	捕獲叛亡
又これに反して、空腹にて飢えたる時は、糟や糠の類にても厭はず好み食するなり。	老人は少年とその食事を異にす。此の句は老し者を若き者は敬む守るとの意なり。	侍とは、そばづかへの女、帷房はとばり、部屋にて女の夫につかふることいふ。	銀燭は銀の燭臺、燁煌はてり光る、乃ち銀の燭臺に火を點すれば、光りはかゞやき渡るなり。	藍は青色、筍は竹の若芽なり、象牙にて飾りたる青竹の寢臺に眠り又は寝ねるなり。	客を招じ、杯をまじえ、觴をあげ、酒杯を交し愉快にたのしむことなり。	心悅びやはらき、且安らかに一家團樂の樂しきを盡す事をいふ。	されば四季に忘らず祖先の祭をつとむ、春の祭は餼、夏の祭は蒸、秋は蒸、冬は蒸といふ。	祭りにはおそれかしこみ、うやまい祖先の靈に拜謝し真心もてこれを營むなり。	人のものごとへ返事を出す際には、は出来る限り委らかによく解る様書くものなり。	又暑熱に堪えがたき時には、風の涼しき所を欲するは、人情の常なり。	駭はおどろき、躍はおどる、超はこゆる、驤はあがるなり、家畜は斯く遊び戯るをいふ。	又君に反逆するもの、罪あつて逃ぐる者は捕へてれん刑罰に處すべきなり。

338

1232

布射遼丸	恬筆倫紙	釋紛利俗	毛施淑姿	年矢每催	璇璣懸幹	指薪脩祐	矩步引領	束帶矜莊	孤陋寡聞	謂語助者
布とは呂布といひ弓を射る名人、療は宣療とて手玉の術に長けたる人。	蒙恬といふ人は秦の時創めて筆をつくれり、蔡倫は漢の時、はじめて紙を作りし人。	紛々とは亂れたる事を解きて世の人共に利益を興ふる事に利したる人なり。	毛とは呉の國の毛氈といふ女、施は越の國の西施といふ女、共に容姿すぐれたる美女なり。	年矢とは年月なり、光陰矢の如く、時々刻々にうつり往きて、かはらざる事なり。	璇璣とは渾天機のこと、天文を見る器械なり。懸幹とは高きにかゝりてめぐること。	指薪とは、薪の燃えてつきざる如く、行いを正しくなせば、必ず安心なるべく。	道を歩むにも法にかならうや頭を上げ一歩一正しく歩むべき事なり。	束帯とは衣冠束帯にして、禮装の時は何人もその容儀を飾り、威儀を保つべし。	孤陋とは才智なく識量の狭きなり。寡聞とは見聞のせまきものをいふ。	語助とは文章には助け言葉有りといふ事なり、助け言葉は數あるものにて其多く用ふるものは
嵇琴阮嘯	鈞巧任鈞	並皆佳妙	工嘖妍笑	曦暉朗曜	晦魄環照	永綏吉劬	俯仰廊廟	徘徊瞻眺	愚蒙等諄	焉故乎也
嵇は嵇叔夜とて晋人にして琴の名手、阮は阮嗣宗とて詩を吟ずること能くす。	鈞巧とは鈞馬といふ人指南車を巧みに作り、任公といふ人は釣魚の業に頗る巧みなりと。	前條の人々は皆な其藝術の真儀に達し、佳妙の境に入りたるなり。	工嘖とは、西施の眉をしまめて惱める姿、妍笑とは毛氈が笑を含たる妍かさなり。	太暉は輝やきて照り、月は光りて、天地間を照し世界はその恵みを受け居るなり。	晦は魄つごもりの事、魄は日の體なり、日月が常に運行循環して天地間を照すなり。	かくすれば幸福にして、永く安らげく心樂しく吉事おのづから來り喜びて事をなす事を得。	廊廟とは宮殿の事にて、何人も何時も宮殿に在る如く出入には俯仰拜揖し謹しみて禮儀を守るべし徘徊はゆきつ戻りつする事、瞻眺とは、ながめかへりみる事なり。	愚蒙とは、自分の智識の十分ならぬをいふ、自分の謙遜なる言葉なり。	焉、哉、乎、也の四字にて常に最も多く用ひらるゝものなり。	

千字文略解終

昭和十一年十月一日印刷  
昭和十一年十月五日發行

井上四體千字文奥付  
(定價七十錢)

不許  
複製

發行元

東京市神田區東神田一八番地  
振替東京五一六五 電話浪花一三六三  
東京市神田區仲町二ノ六  
振替東京一六八五九 電話下谷五九五

淡海堂出版部  
辰文館出版部

編書者 井上 千 圃  
東京市神田區東神田一八番地

發行者 酒井 久 一郎  
東京市神田區仲町二丁目六番地

發行者 中 島 泰 治  
東京市荒川區三河島町五丁目九三三番地

印刷者 天 野 喜 子 三 郎  
同 前

印刷所 淡海堂荒川工場

終